牛の尿は、農業を救う

オホーツク海沿岸から石北峠まで東西に広がる北海道北見市は、
乳牛飼養戸数７１戸（６，８８１頭）・肉牛飼養戸数１９戸（１，５２８頭）※と
一戸あたりの飼育頭数も増加傾向にあり、酪農・畜産の町として発展を続けています。
この発展の裏にあった問題 ── 川や農地に廃棄される牛のし尿による悪臭と川や水源の水質汚染 ── は、
１９９０年代に、この町の住民たちを悩ませ続けてきた公害問題でもありました。
ある時、この町で牛のし尿による悪臭問題の改善に取り組んでいたある酪農家が、
私たちのところに牛の尿から作った液体を持ち込んできました。
驚いたことに、その牛の尿から作った液体には、土壌中の微生物を活性化することで
土の状態を改善し、作物の収穫量を増やす力がありました。
この液体こそが、環境大善が消臭液や土壌改良材を生み出す元となる「善玉活性水」だったのです。
私たちは、この液体の研究を行い、循環型のビジネスを発想しました。
地域の酪農家から牛の尿を買い取り、発酵・培養して「善玉活性水」を作る。
それを原料に消臭液や土壌改良材として製品化し、価値あるものに変化させて地球に戻していく。
廃棄物として扱うのではなく、牛の尿の特性を活かしながら新たな付加価値を持たせる。
つまり、牛の尿をアップサイクルさせながら循環させていく。
私たちは、このシステムを「アップサイクル型循環システム」と呼んでいます。
このシステムを利用して作った製品を使うだけで、購入者は自ずと地球環境の改善に一役買ったことにもなる。
これは環境大善が辿り着いた一つの結論です。
この「アップサイクル型循環システム」から生まれた無害無臭の「液体たい肥 土いきかえる」は、
かつて農薬の使いすぎによって、土壌の回復が重要課題となっている
ベトナム、カンボジアなどの東南アジア諸国からも注目を浴びています。
２０１９年にはスリランカの農業行政官が循環型環境ビジネスに興味を示し、当社の事業を視察に訪れました。
２０２０年には国際協力機構（ＪＩＣＡ）の「中南米日系社会との連携調査団」の一社として選ばれ、
ブラジルへ派遣され、熱帯サバンナ地域での土壌改良の可能性を探ることができました。
環境大善は、世界中のどの国においても環境の改善に貢献できるようさまざまな研究開発を進めています。
そしてこれからも「アップサイクル型循環システム」を地球規模で広めていくつもりです。
「牛の尿で、世界の農業を救いたい」。私たち環境大善は、本気で、そう考えています。

地球の健康を見つめる

環境大善

環境大善株式会社 北見市端野町三区438-7 tel 0157-67-6788

※乳牛飼養戸数・肉牛飼養戸数は令和元年 市政概要より抜粋